
空（ボーボボのファンフィクション）

y

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボーボボのファンフィクション
空

【データ】

20735G

【作者名】

y

【あらすじ】

ネオ新宿で敗れた終は氣絶した邪ティの顔を覗き込みながら考える。自分にはこの存在がいると。今まで囚われていた権勢欲から解放され、見上げる青空のようにその精神は自由に飛び立つて行った

(前書き)

集英社「ボボボーボ・ボーボボ」のファンファイクションです。各関係者様・関係団体とは無関係です

「だめだ・・・」いつらお口にチャックだ
オレンジ色の生き物が僕等を見下ろしている。情けないことに指一本動かせない

「そつちはどうだよ？」

ふるふる震える生き物が、僕の隣に横たわっている邪ティに視線を向けているのが分かつた。彼女は意識を失っているようだつたが一
一自分がどんな状態であろうと彼女だけは守らなければいけない

「ねえ、あの黒いのが変な歌唄つてるよ！」

桜色の少女の澄んだ声が響くと、僕等を見下ろしていた生き物達が瞬時にそれに反応し僕等から離れた

「？」

彼等に気付かれないように視線をその方向に送ると、其処にはギターを抱え妙な歌を唄つているBBがいた。ダメージを全く受けてい
ないかのように、敵である彼等とふざけあつていたが

「意味わかんねえ――――！」

と、黄色いアフロに吹つ飛ばされてしまった

「ちつ・・・まあいい。行くぞビュティ――なんとかなんだろ」

「待つてよボーボボ！」

黄色いアフロの一聲と共に、彼等は戦場から去つていった

「・・・ん・・・・」

邪ティが微かな声を発した

彼等が完全に去つていったのを確認して僕は起き上がり、海の水でハンカチを濡らしてその小さな額に置いた。確認したが、彼女の体は擦り傷と軽い打撲位で、やはり彼等は――自分達にとつて最も大切な少女の外見そのものの邪ティにはかなり手加減していたよう

だ。気絶させる程度の衝撃を彼女に与えただけに過ぎないようだつた。一方の僕には内蔵だのあばら骨だのめちゃくちゃにしてくれたようだつたが、僕は邪ティ（ツツコミ専門）と違つて、防御力と回復力は非常に高いので（リアクションボケ専門だから）結構平気になつてきた。遠くにふつ飛ばされていたパンツ丸も拾つてきて海水にぶち込んだがまだ目覚めない——それ程彼等は強かつたのだ。おそらく三世は倒され、この帝国は崩壊するだろ？

「ふう・・・なんだか疲れたな・・・」

仰向けに横たわらせた邪ティの隣に座つて、空を見上げてみた。蒼い空。晴れ渡つた空。白い雲がゆっくりと流れしていく

ずっとずっと色んなコトを考えて、先の先を読んで、色んな人を操作つて——

青ざめた胸の内をくだらない笑顔で隠して——

脇目も振らず追いかけたのはなんだつたんだ？

——最終的に僕は何処へ行きたかつたんだろう？

「・・・邪ティ・・・早く目を覚ましてよ・・・」

なんでだろ？今はどつでもよくなつてきた。ずっと一人だつたけど——別にそれが僕には普通のことだと思っていたけど、寂しいとか悲しいとか、本当に全くそんな感情はなかつたけれど

「・・・い、らぎ・・・」

邪ティが僕の名前を呼んだ。目を覚ましたのかと思って慌ててその綺麗に整つた顔を覗き込んだけれど、その瞳は未だ閉じたままだつた。寝言なのか・・・

「・・・あーそうだね・・・」

なんとなく分かつた。宿敵を倒す為に造られた——この人工の少女。彼女を三世から奪つてしまおうと考えたのは特に意味はなかつた。三世やバブウは困るだろうと、彼女の能力を僕の為に使わせよう。利用しようと考えていただけだつたけれど、今では——

彼女と戦い、話し、笑い合つてることがどれだけ自分を満たして

いるのか

何の作為も無しに、利害も服従も恐怖も無しに
対等に僕の名前を呼んでくれるこの少女がいてくれるなら
(あの黄色いアフロも桜色の少女にこういう想いを抱いているのだ
うづか)

彼女が傍にいてくれるのならば

それでいいと思った

三世を倒すことも、国を取ることも、権力を手に入れることも
もういいと思つたんだ

今の僕はとても満たされているのだから

「おーい、このツツコミ、俺にくれ

いきなり視界が暗くなり、背後から低い声が掛けられた
「なつ・・・なんだ――BB?―!」

こんな近くに来るまで気付かなかつた。僕の背後にはBBがそのバ
力でかい巨体を屈めて、邪ティを覗き込んでいた

「おーい、早く目覚まして俺にツツコんでくれや。ツツコミがい
ねエんじゅどーも調子が出ねえんだよ。お前が俺にツツコんでくれ
てりやあ、あんな奴等簡単に倒せたんだぜ?」

BBは黒いアフロに黄色い花弁をくつづけて、ぱたぱた邪ティに風
を送つてゐる

「どんなひまわりだー!つてツツコめ。早く目覚ませ―――痛で
ツ!てめえ何すんだ!」

僕は思わずその花弁を掴んで引きちぎつた

「邪ティは疲れてるんだよ!寝かせといつてやつてくれない?!

「・・・んだテメエ!大体コイツは俺様専用のツツコミの予定だつた
んだぜ?」この世界じゃツツコミは貴重なんだよ!横取りしやがつて
!よこせ―――!

「わつ・・・待て・・・！」

いきなりBBが邪ティの華奢な体を抱え上げたのを見て、僕は慌てて邪ティの腕を掴んだ

いきなりがばつと起き上がつたパンツ丸が、飛び上がって邪帝の頭に乗り、B Bに目潰しを食らわせた

痛で、」「あー、さあいれテスコト、」「ハジは貰っていくがん
な——ん?」「

？」

巨体に振り回されながら喧騒を続いている僕等は、急激に周囲の温度が下がっているのを感じて動きを止めた瞬間——

「お前らいい加減にして————.」

卷之二

邪ティの声が響き渡つた瞬間に、地中から無数の氷柱が出現し、僕等三人は串刺しになつた

高く上げたまま固まっているBBの腕から、邪魔はひるりと降り、すつ、と立った

•
•
•
/S/
h

「人が休息を取つていれば耳元でうるさいんだよお前ら！好き勝手言いやがつて！私は人形じゃねえんだよ！このハジケバカどもが！」僕の体も半分ほど凍つていて、パンツ丸に至つては完全に氷柱の才ブジエと化していた

「おおー目覚めたかー！よしソシコんでくれやー！お前が俺を目覚めさせてくれた時わざと姿を隠して「いねえええ？！」ってソシコ

んで欲しかったんだよ俺さ―――でもお前どうか行っちゃってよ
！ずっと探してたんだぜ―――？！」

BBは体を覆う氷をばしばし割りながら、邪ティに嬉しそうに声を掛けている

「邪ティ！そいつと話すな―――？」

慌てて邪ティに駆け寄るとすると

「・・・なら今ソッコんでやるよ」

邪ティの表情が井上 彦先生ぱりのリアル顔になつた瞬間、奥義氷結時間が炸裂し、足場が崩れた

「終！逃げるよ…」

崩れ落ちる岩場から邪ティが僕に向かつて叫んだ。僕の体を覆う氷が一瞬で消え去る

「あいつはめちゃくちゃしつこい…まともに戦つても疲れるだけだ！」

BBは落下しながらもその巨体を風船に乗せて邪ティに少しでも近づこうとしている。ああソッコめ！俺様の1トンの体がこんな風船で浮かぶわけねえ―――ってソッコめ―――とにかくにやにや笑っている「そうだね邪ティ…とにかく今は体調を回復していざれヤツを倒そう

「あつたり前だ！誰があんなヤツの相方になるか！」

邪ティはBBの風船に氷柱を飛ばしているが、くねくねかわされていて、ちつ、と舌打ちをしている

「―――僕ならいい？」

あんなヤツ、とこの部分に反応してしまった僕は思わず、そう呟いてしまった

「…え？」

驚いたように振り向く邪ティの表情。普段無表情な分、僅かでも感情を現した彼女の顔は非常に可愛いい

「…あのなあ！今そーいうこと考えてる状況か？！」

パンツ丸の氷が落下してくる岩にぶつかって破片に成り果てている

のを見ながら僕は笑う

——心の底から本当に笑う

楽しいね

君といふと

本当に

この蒼い空のように 白い流れる雲のように

気持ちが良くて

澄んでいて

風のまま、自由に飛んでいける

なんだか僕は色々なものから解放されたみたいだね
何もかも君のお陰だと思つ

ありがとう

邪ティ

(後書き)

読んで下さってありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0735g/>

空（ボーボボのファンフィクション）

2011年1月22日14時59分発行